

パプアニューギニアにおける民族考古学的調査（八）

高橋龍三郎・中門亮太・平原信崇・岩井聖吾・服部智至

はじめに

二〇一〇年八月、今までの研究の継続として、我々は四度目の調査のためにイーストケープ、トパミツションを訪れた。今回の調査目的は母系制社会における土器生産の実態と土器製作技術の地理的拡散に関する基礎的な調査である。

イーストケープ土器伝統の土器は、ミルンベイ州を中心とする一帯に分布範囲を広げている。それらは共通の土器型式の特徴を分有している。今までの調査で、土器製作において母娘という最も身近な関係において技術的伝習が行われていることが判明し、それが世代を超えた縦方向の

技術的継承の基盤であることがわかった。一方、クラン間の婚姻関係や居住の移動方式などは、製作技術が同時代に横方向へ転移する契機となると考えられる。母系制社会においては一般に女性の婚出は避けられ、むしろ男の移動が普通であるとのイメージがあるが、実態はそうではなく女性も婚後に頻繁に移動するのである。したがって婚後の居住移動 (Post Marital residence Pattern) は、本地域の土器製作技術の地理的拡散と密接な関係にあると考えられ、横方向の技術転移の原動力となり、地理的な分布に影響を与える一因と予測されるのである。それらの婚後の居住移動に伴う製作技術者の移動、すなわち女性の移動は土器型式の地理的分布、拡散に直接的な影響を与える因子となりうるのである。

ところでトパミッションを含むイーストケープ一帯は、克蘭ごとに四種類のトーテムカテゴリーを保有するシステムを依然として残している。克蘭外婚制に基づく婚姻関係と人の移動は、トーテムの如何によつて決定されるので、トーテムシステムは土器製作技術の移転と関連し、それを規制する側面をもつと考えられる。今回、トーテムについて詳しく情報を収集したのはその理由による。

今回の調査は、トパミッションのダワタイ村 (Dawatai) やベトゥトゥ村 (Betutu) などのサブ克蘭において、集落の実態や克蘭の名称、それぞれの保有するトーテムの種類を調査し、それによつて、ある克蘭の土器製作技術がどのように保存され、一方で拡散転移し他の克蘭の技術とどのように混交するのかを考える材料とした。

(高橋龍三郎)

1. 二〇一〇年度の調査概要

二〇一〇年度調査は、八月一八日から二八日の行程で、ミルンベイ州トパミッション (図1) において実施した。本地域は、ニューギニア島の南東端にあたり、ミルン湾を挟む北側の半島に位置する。東はケヘララミッション、西はイブライミッションと接しており、行政的な区分として

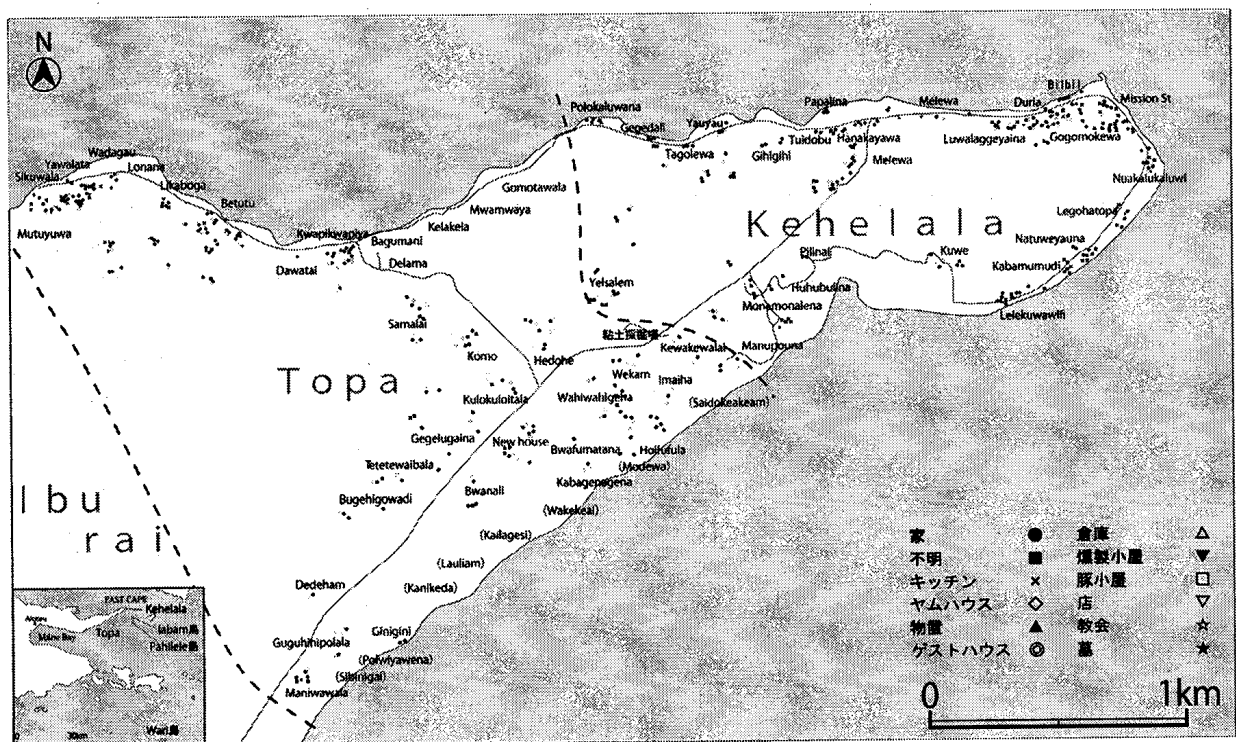


図1 調査地全体図

表 1 2010 年度調査行程

日程	行程・調査内容	調査地
8月18日(水)	【空路】成田空港⇒ジャクソン国際空港（ポートモレスビー）	
8月19日(木)	【空路】ジャクソン国際空港⇒ガーニー空港（アロタウ） ミルンバイ州政府オフィスで調査許可証の申請・発行、前年度調査レポートの提出 マーケットで食料・生活雑貨などの買い出し 【陸路】車にてトパミッション・ダワタイ村へ	ダワタイ
8月20日(金)	今次調査の打ち合わせ シクワラ村で土器製作者への聞き取り調査	シクワラ
8月21日(土)	ヤワラタ村で土器製作者への聞き取り調査 ムウムワヤ村でトレハの実見	ヤワラタ ムウムワヤ
8月22日(日)	ビワミッションの見学 これまでの調査内容の整理	ビワミッション
8月23日(月)	ワダガウ村、ロナナ村で土器製作者への聞き取り調査	ワダガウ ロナナ
8月24日(火)	ベトゥトゥ村、クワピクワピヤ村で土器製作者への聞き取り調査 ベトゥトゥ村で土器データの収集（写真撮影、拓本、実測）	ベトゥトゥ
8月25日(水)	これまでの調査内容の整理 ダワタイ村で親族組織に関する聞き取り調査	ダワタイ
8月26日(木)	バグマニ村、デラマ村で土器製作者への聞き取り調査	バグマニ デラマ
8月27日(金)	【陸路】車にてアロタウへ 【空路】ガーニー空港⇒ジャクソン国際空港	アロタウ
8月28日(土)	【空路】ジャクソン国際空港⇒成田空港	

は、マラマタナ地域政府 (Malamatana Local Area Government) の管轄下にある。

我々は、二〇〇七・二〇〇八年度にも本地域に入っており、GPSを用いた集落の記録、親族組織に関する聞き取り調査、土器製作の実見、土器製作者への聞き取り調査、土器データの収集などを行ってきた（高橋ほか二〇〇八・二〇〇九）。基礎的なデータは一通り集まったものの、それらを整理・検討する過程でいくつか不足するところがあった。二〇一〇年度調査は、それら不足するデータを補うことを主目的とした。主な調査内容は土器製作者の系譜に関する聞き取り調査、親族組織に関する聞き取り調査、土器データの収集である。調査行程の詳細については、表1を参照して頂きたい。

（中門亮太）

2. 親族組織に関する聞き取り調査

本章では、今次調査で明らかとなったトパミッションにおける諸村の親族組織について報告する。

（1）移住の歴史

ダワタイ村での聞き取り調査によって、当村に伝わる移住の歴史について知見を得た。以下、本節にて報告する。

ダワタイ村は、トパミッションの北岸部中央西寄りに位置する集落である。現在、ダワタイ村のランドオーナーはガルボイ (Garuboi) クランに属するMi氏である (図2)。Mi氏から四世代遡った曾祖母を含む五人の兄弟姉妹がダワタイ村の最初の居住者である。彼らは、ノルマンビー島 (Normanby Island) に所在するクラダ (Kurada) 地方のダワタイ村からやって来て、トパミッションの現ダワタイ村を形成したという。

Mi氏は、五人の兄弟姉妹の長女にあたるB氏の系譜上に位置する。B氏は一人娘のMa氏をもち、Ma氏は三人の娘と二人の息子をもつ。三人の娘のうち、長女と次女には子供がおらず、三女がMi氏の母親にあたる。トパミッションを含むイーストケープ周辺では母系制に基づいて土地が相続される。したがって、ダワタイ村における土地所有の権利は、最初の居住者であるB氏からMa氏へ、そしてMa氏からその長女へ継承されたが、長女と次女に子供ができなかったため三女へと継承され、最終的に、その娘である現ランドオーナーのMi氏へと継承されている。

なお、現ランドオーナーのMi氏はガルボイクランに属し、母系制であることから、その祖先である五人の兄弟姉妹も同様にガルボイクランに属すと考えられる。筆者らはノルマンビー島で調査を行っていないため、ノルマンビー

島にダワタイ村が存在するのか、あるとすればダワタイ村はガルボイクランに属するのか、あるいは属すのであればMi氏が属するガルボイクランと同一のクランであるのかなどの詳細は不明である。今後、ノルマンビー島に存在するとされるダワタイ村での親族調査を行うことにより、移住と集落の形成、クランの分岐などに関するさらなる知見を得られるに違いない。

(平原信崇)

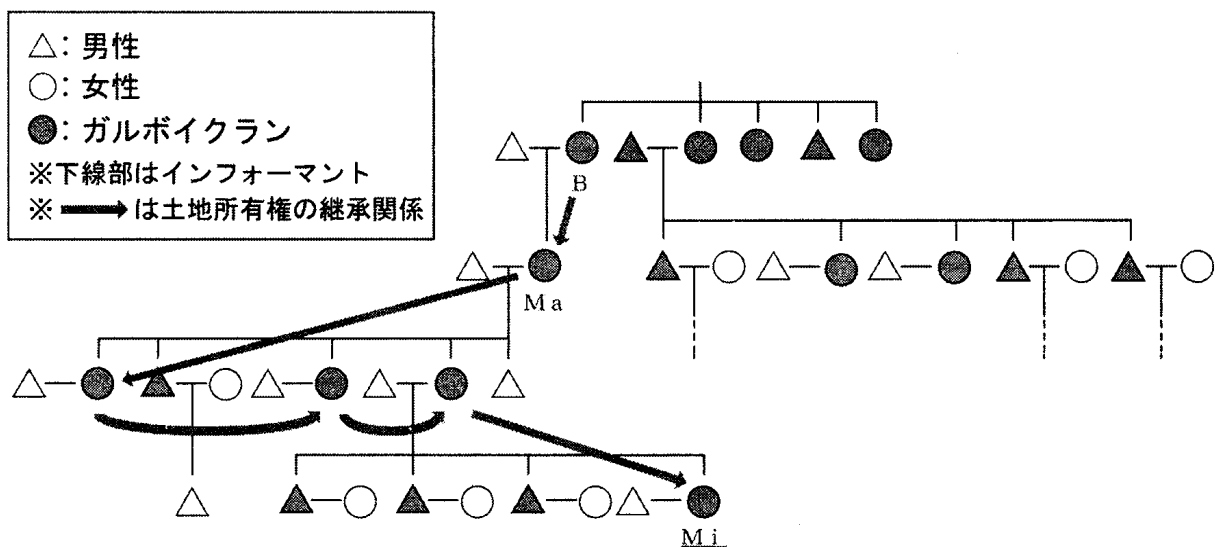


図2 ダワタイ村のファミリーツリー

(2) 土地相続制度の例

ダワタイ村は、女性が絶えず生まれて母系制での土地相続がうまくいっている例である。一方で、女性が生まれず、土地相続がなされない事例も少なからず存在する。過去の調査では、ランドオーナーの許可によって父方の土地に継続居住できる制度(ナトゥレヤ: *natuleya*)や、新たにやってきた移民等に土地を与えて居住を認める制度(テレゲレタナ: *telegetana*)を確認している(高橋ほか二〇一〇)。今次調査では、いくつかの集落での聞き取り調査によって、養子縁組が行われていることを確認した。以下では、ワダガウ(Wadagau)村の聞き取り調査で確認された事例を紹介する。聞き取り調査は、ワダガウ村のランドオーナーであるS氏とその妻A氏をインフォーマントに行なった。

ワダガウ村はトパミッションの北岸部西側に位置している集落である。ワダガウ村の土地所有権は、代々この地に居住していたS氏の系譜であるフラナ(Hulana)クランに属する(図3)。本来土地所有権は、S氏の母からその娘へ受け継がれるが、S氏には姉妹がいないため、現在は一時的にS氏が土地を相続している。A氏とS氏の間には娘一人と息子三人がいるが、娘は既に亡くなっており、養子として受けたのがJ氏である。J氏は本来、A氏の伯母

の曾孫にあたり、A氏と同じヘヘゴ(Hehego)クランに属する。

母系制社会においては、男性は本人一代限りにおいて、母方の土地を所有することは可能であるが、その所有権を自身のクランに相続させることができない。そのため、ワダガウ村の土地におけるフラナクランの権利はS氏をもって終了となり、将来的にA氏のヘ

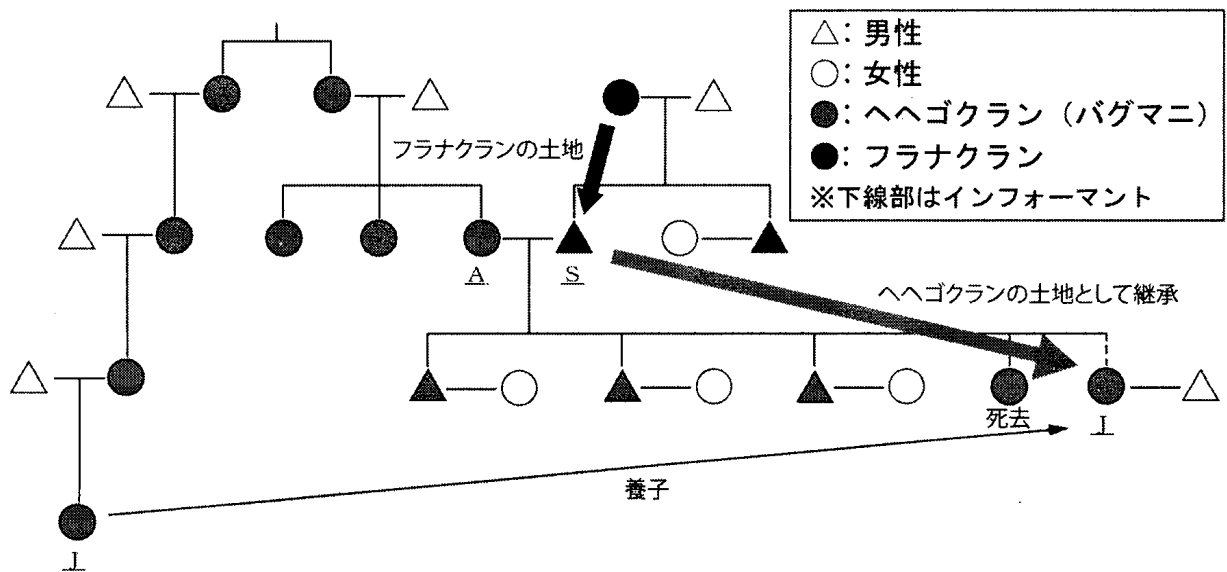


図3 土地相続の例(ワダガウ村のファミリーツリー)

ヘゴクランを継承した子供に相続されることになる。この場合、土地所有権がフラナクランからヘゴクランに転換することになる。

以前の調査で確認したナトゥレヤという制度は、父方の土地に継続して居住することをランドオーナーが許可するものである。そのため、土地の所有者・クランが変わることとはない。また、テレゲレタナという制度は、自身が全く関係のない土地であっても、その土地のランドオーナーの許可を得ることによって、土地利用・居住を認められる制度である。この場合は、許可された土地を自分の娘へと継承することができるが、元々自身が属していたクランを捨ててその土地のクランに入ることが条件となる。つまり、この二制度は、特定のクランが所有地である土地を分け与えるという形であるため、土地を所有するクランが変わることはない。しかし、ワダガウ村のように土地相続者がおらず養子を受けた場合は、土地を所有するクランが、別のクランに変わるといふ事象が起こる。そのため、元々は所有権が異なる土地を、自身のクランの土地として併合し、勢力を拡大し得る可能性を指摘できる。先に記した移住の歴史を正確に辿り、併せて検討することで、本地域における土地相続・所有の在り方をより明確にしていくことができるであろう。

(服部智至)

(3) バグマニ村の親族組織に関する聞き取り調査

バグマニ (Bagumani) 村は、トパミツシヨンの北岸部中央東寄りに位置する。インフォーマントは、同村出身でヘゴクランに属するK氏である。K氏には過去の調査で土器作りを見せてもらい、製作技術の系譜や土器作りについての聞き取り調査を行ったことがあるが、K氏の親族組織に関する聞き取り調査を実施するのは今回が初めてである。以前にK氏はケヘラミツシヨンのビルビル (Bilbil) 村に居住しており、その時にT氏と出会って結婚するに至った。しかし、二〇〇八年に夫が亡くなったため、自身の土地であるバグマニ村に帰って来たと言う。

K氏の系譜は、代々バグマニ村出身であり、ヘゴクラン (バグマニ) に属する (図4)⁽¹⁾。K氏の夫であるT氏は、ケヘラミツシヨンのビルビル村出身であるが、その両親はヤバム島 (Iabam Island) 出身であり、T氏とその母親はヘゴクラン (ヤバム) に属する。つまり、K氏とT氏は、ヘゴクラン同士で婚姻関係を結んでいる。また、T氏の父親はヤバム島のムワムワヤ (Mwanwaya) 村出身であり、ヘゴクラン (ムワムワヤ) に属する。そのため、T氏の両親においても同一クランに属する者同士で婚姻関係を結んでいることになる。

ここで問題となるのは、ヘゴクランという同一クラン

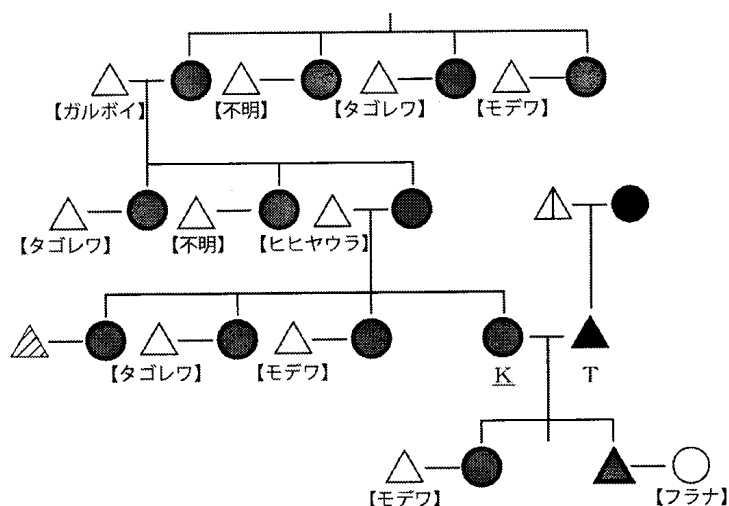
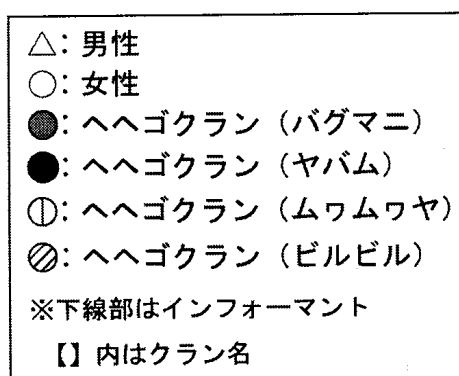


図4 バグマニ村のファミリーツリー

に属する者同士の婚姻についてである。というのも、イーストケープ周辺地域においては、伝統的に同一克蘭に属する者同士の婚姻が避けられているからである。ただし、ここでの注意しなければならぬことは、たとえば克蘭名とトーテムが同一であったとしても、所属する親族組織が同一ではない可能性があるということである。後述するように、本地域における親族組織にはメジャー克蘭とサブ克蘭が存在する。サブ克蘭は、

それぞれに固有の移住の歴史を持っており、お互いに異なる集団として意識されている場合が多い。

例えば、T氏の父親の出身地であるヤバム島のムウムワヤ村と同名の村がトパミッシンにも存在する。トパミッシンのムウムワヤ村の一部の人々はヘヘゴ克蘭に属している。ヤバム島のムウムワヤ村からバグマニ村に婚入した男性の話によれば、トパミッシンのムウムワヤ村における元々の居住者は、ヤバム島のムウムワヤ村から移住して来た人々である可能性が高いと言う。したがって、両村に居住する人々とはともにヘヘゴ克蘭に属する。その一方で、移住した時点でヤバム島のムウムワヤ村から分岐したトパミッシンのムウムワヤ村が新たなサブ克蘭として誕生し、異なる集団としての意識が見られる。したがって、ヘヘゴ克蘭に属する者同士でも婚姻関係を結ぶことができるという。

(平原信崇)

(4) ベトゥトゥウ村の親族組織に関する聞き取り調査

ベトゥトゥウ村はダワタイ村の西隣に位置している集落である。当村は、フラナ克蘭によって代々所有される土地であり、二つのサブ克蘭がそれぞれベトゥトゥウ村西部(West Betutu)とベトゥトゥウ村東部(East Betutu)に居住している。

調査時のランドオーナーはM₀氏であり、ベトウトウ村の土地所有権は彼女の一部によつて母系を通じて受け継がれている(図5)。集落はM₀氏の五世代前にあたるK_W氏の代に形成された。K_W氏の系譜はベトウトウ村西部のサブ克蘭に属している。一方、ベトウトウ村東部のサブ克蘭は、元来タゴレワ(Tagolewa)克蘭に属すD氏の系譜であり、移住してきた際に、テレゲレタナの制度によつて、当時のベトウトウ村のランドオーナーからベトウトウ村東部での居住を許可されたという。今次調査では、K_W氏の系譜について親族調査を行なつたため、D氏の系譜の詳細は不明である。

M o氏と夫S i氏の間には娘三人、息子六人がおり、長女であるR氏が将来的には土地を相続する。そのため、今後もベトウトウ村では代々フラナ克蘭が引き継がれていくことが予想される。また、ベトウトウ村のランドオーナーは当村だけでなく、ビワミツションに位置するワガマラ (Wagamala) 村の土地所有権をも有しており、ワガマラ村にはベトウトウ村の住人であれば誰でも居住することができるといふ。

ベトウトウ村では特定のクラン（あるいは特定の村）との婚姻関係はなく、M o 氏の世代ではいずれも平均的に他のクランとの婚姻が行なわれている。しかし、娘であるR

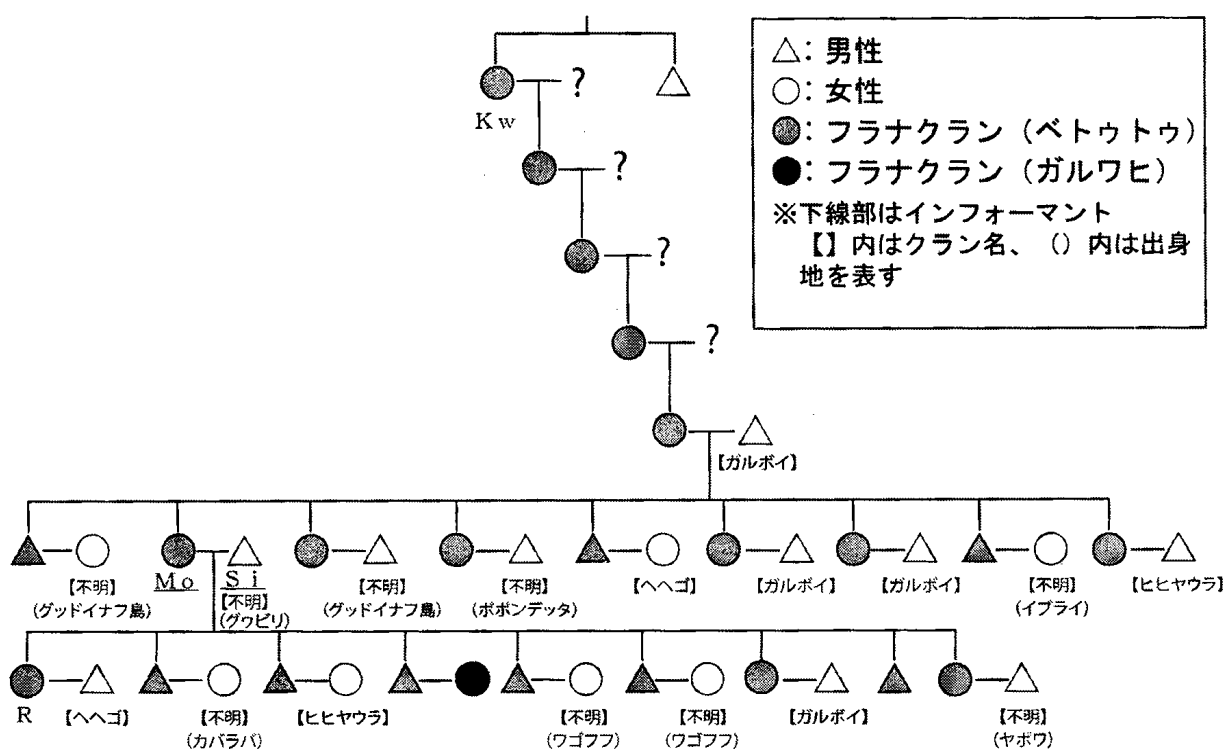


図5 ベトウトウ村のファミリーツリー

氏の世代では、フラナ克蘭同士の婚姻関係が認められる。聞き取りによると、同一克蘭に属する者同士の婚姻が可能なのは、同一克蘭の中でも移住してきた経緯や過程が異なるサブ克蘭に属する者同士である場合に限り、という。

ベトウトウ村での同一克蘭に属する者同士の婚姻も、先のバグマニ村と同様の事例と考えられる。ただし、フラナ克蘭に属する人々のニューギニア島への移住過程が明確でないため、他の可能性を含めて、今後検討する必要がある。
(服部智至)

(5) クランとトーテムについて

トパミッションでは、二〇〇七・二〇〇八年度調査で、克蘭とトーテムについて聞き取りを行い、報告を行った(高橋ほか二〇〇八・二〇〇九)。しかし、今次調査で確認をしつつ再度聞き取りを行ったところ、いくつかの点について補足点・修正点があったため本節で改めて報告する(表2)。

まず、以前の調査では、「デラマ (Delama) 村が属するタウディ (Taudi) クランでは、居住する場所によってハナウリ (Hanuli)、ワヤク (Wayaku)、ヨビラーババナ (Yobila-babana) という二つの呼び名がある」との報告を

パプアニューギニアにおける民族考古学的調査 (八)

表2 トパミッションにおける克蘭とトーテム

major clan	totem				sub clan
	bird	snake	fish	plant	
Modewa	kulokulo	tuinana	kebolia	hiyaga	Delama
	keroro				Pahilele 島の一部
Hulana	magisubu	keukeula	bahibahi	puto	Wadagau Mutuyuwa Likaboga Kelakela Sikuwala 村の一部?
				ohiyo	Betutu
Hihiyaula	takowa	(+)	baewa	madawe	Lonana
Tagolewa	binama	(+)	(+)	yougwana	Tagolewa Natuweyauna
Garuboi	waiwai	garuboi	igomida	(+)	Dawatai Mwamwaya 村の一部 Sikuwala 村の一部?
Hehego	gabubu	hanauli	dayadayasi	modau	Yawalata
			tuhilili	yobila	Bagumani 村の一部 (Hanuli) Bilbil Mwamwaya 村の一部
		keukeula	(+)	hiyaga	Bagumani 村の一部 (Taudi, Wayaku, Yobila-babana)
Bagumani	kehoi	hanauli	tuhilili	yobila	Bagumani 村の一部

した（高橋ほか二〇一〇）が、今次調査では、デラマ村はモデワ克蘭に属することであった。過去の調査ノートを確認したところ、「タウデイ」、「ハナウリ」、「ワヤク」、「ヨビラーババナ」の四つは、バグマニ村におけるサブ克蘭の名称であった。デラマ村と報告したことは、完全に報告者の認識違いであり、この場を借りてお詫びとともに訂正する。これら四つの名称は、バグマニ村における四人の姉妹が、それぞれ一族の居住場所を別にしていたことに起因している。そのため、本来は異なるサブ克蘭というよりは、居住場所による呼称の違い程度のもと考えられるが、一部においては異なるトーテムを有する例がある。詳細については追加調査を要する。

また、シクワラ (Sikwala) 村は以前の調査でガルボイ克蘭と報告した。これは、インフォーマントに聞いた答えであり、今次調査でも同じ人物に聞いたところガルボイ克蘭との答えが返ってきた。しかし、調査を進めるうちにシクワラ村はフラナ克蘭であるとの回答を得た。移住の歴史などを考慮した結果、フラナ克蘭の方が妥当であると考えられるが、後述するように本地域においては、一集落一サブ克蘭という対応関係が絶対ではない。そのため、本報告では双方の可能性を指摘しておく。

さて、本地域において一般的に克蘭と言われるもの

は、メジャー克蘭のことを指し、実際の血縁集団をさらに大きく包括する親族組織である。今次調査で確認できたメジャー克蘭は七つあり、それぞれ鳥・ヘビ・魚・植物の四種類のトーテムを有し、いくつかのサブ克蘭に分かれる。サブ克蘭の存在は、これまでの調査では明確に知ることができなかった。サブ克蘭は、ほとんどが集落名と対応しており、それぞれの出自とより密接な関係を持つ親族集団と考えられる。トーテムは鳥が最も重要とされており、メジャー克蘭名を鳥トーテムで答えるものも少なからずいる。そのため、我々が単に「あなたの克蘭は？」と尋ねた場合、回答としてメジャー克蘭、鳥トーテム、サブ克蘭の三通りの答えが返ってくる可能性がある⁽³⁾。これまでの調査では、そのような認識が甘かったため、情報が混乱していた。

今次調査において、同じメジャー克蘭内での通婚関係を数例確認できたが、これはいずれもサブ克蘭が異なる為に許されている。サブ克蘭の歴史は、メジャー克蘭が所有する土地における居住の開始や移住の話から始まることが多い。つまり、サブ克蘭が異なるということはその土地における居住や移住の歴史が異なるということであるため、近親者とはみなされず通婚が可能であると思われる。サブ克蘭によっては、同じメジャー克蘭に属しな

がらも、一部において異なるトーテムを持つことで差別化を図る例が見られる。

一方、メジャークランは、伝統的な居住者や土地そのものの伝説に由来するものと考えられる。メジャークランは複数のサブ克蘭に分節化する形が一般的であるが、一部においてサブ克蘭が同じでもメジャークランが異なるという事例を確認できた。例えば、「ムウムワヤ」はサブ克蘭の一つであるが、メジャークランはヘゴ克蘭とガルボイクランの二種類の人々がいる。ヘゴ克蘭の人々は、ヤバム島のムウムワヤ村から移住してきた人々とされる。サブ克蘭は、出自と密接な関係を持つ親族組織と考えられるため、ガルボイクランの人々はまた別の居住の歴史を持つのであろう。現時点では、ムウムワヤ村におけるガルボイクランの人々の移住の歴史についての情報が無いため、なぜ彼らが自身の克蘭を所有したまま「ムウムワヤ」の土地に居住できるかは不明である。しかし、「ムウムワヤ」が単なる集落名であり、ヘゴ克蘭とガルボイクランの人々は、そもそもサブ克蘭も異なっている可能性も考えられる。サブ克蘭と集落名が単純に対応すると考えるのは早急であり、土地相続や居住の制度も含めて理解を深めていく必要がある。

また、バグマニ村では一部の野心的な人々が、自分たち

の影響力を強めるために、自身のサブ克蘭をメジャークラン名に冠するという例を確認できた。バグマニ克蘭の成員は、バグマニ村出身者であり、伝統的にはヘゴ克蘭に属する。しかし、一部の人々はバグマニの名をメジャークランに冠し、鳥トーテムをケホイと改めている。サブ克蘭は、おそらく自身の出自に関わることなので容易に変更はできないであろうが、メジャークランと鳥トーテムは社会的な背景の中で変化し得ることが窺える。同一集落内における複数克蘭の共存や、メジャークランの出自など、追加調査を行うべきことは多いが、今次調査の成果としては以上をもつて、本地域における克蘭とトーテムの理解としておきたい。

（中門亮太）

（6）小結

以上のように、これまでやや混乱気味であった本地域における親族組織は、今次調査の成果によってかなり明確になってきた。特に、メジャークランとサブ克蘭の関係は本地域における親族組織の根幹をなすものと理解できる。サブ克蘭は、これまでに記録してきた集落名と重複するものが多く、明確な血縁関係をたどることができる集団と考えられる。サブ克蘭には、それぞれに居住や移住の歴史が存在し、同一のメジャークランに属しながらも、異な

る集団という意識があるようである。そのため、メジャー・克蘭が同じであってもサブ・克蘭が異なる（移住の歴史が異なる）という理由で、婚姻関係を結んでいる例がいくつか確認できた。しかし、これらはファミリー・ツリーを見るとわかるように、バグマニ村のインフォーマント（六十代）の一世代上あたりから頻繁に見られるようになる事例である。むしろそれより上の世代は、異なるメジャー・克蘭間での婚姻が普通である。また、バグマニ村においては、ケヘラミツ・ション・トパミツ・ション内で婚姻関係が成立している場合が多いが、ベトゥトゥウ村のインフォーマント（七十代後半）以下の世代では、ワゴフフ（Wagohuhu）ミツ・ションやグッド・ダイナフ島（Goodenough Island）、オロ（Oro）州ポポンデッタ（Popondetta）など、遠方との婚姻関係が顕著に認められる。これらの事例は、伝統が薄れてきているという可能性も考慮して検討していく必要がある。一方で、ムウムワヤ村やバグマニ村のように、一つの集落に複数のメジャー・克蘭が存在するという事例もある。単純に集落と克蘭が対応するという考えは、本地域の親族組織を考えるうえで混乱を招く恐れがあり、土地相続や居住の制度、移住の歴史などを押さえるつつ情報を収集していく必要がある。（中門亮太）

3. 土器製作に関する聞き取り調査

イースト・ケープ周辺地域における土器製作については、これまでに数回にわたって報告してきたとおりである（高橋ほか二〇〇七・二〇〇八・二〇〇九・二〇一〇）。今次調査では、土器製作を実見する機会がなかったが諸村で親族調査によるファミリー・ツリーの作成を行ない、それをもとに随時、土器製作者に対する聞き取り調査を行った。本章では、特に土器製作の技術が後代に引き継がれているベトゥトゥウ村を中心に、主に土器製作技術の継承について報告する。なお、ベトゥトゥウ村では、先述のM氏とその夫Si氏をインフォーマントに聞き取り調査を行った。

ベトゥトゥウ村ではインフォーマントのM氏の他に、W氏、P氏、R氏の計四人が土器製作を行っている（図5）。ただし、M氏は二〇〇八年に指を負傷したことが原因で、調査時は土器製作を行っていないかった。またW氏は、先述したワガマラ村に在住しているが、現在も継続して土器製作を行っている。

M氏、W氏、P氏の三人は、いずれも二〇一三〇歳の頃に母親のE氏から土器製作技術を教わっており、R氏には母親のM氏が教えている。しかし、土器製作は女性全

員が行うのではなく、E氏の娘であるにもかかわらず土器製作を行わない女性も多い。M○氏の娘たちもR氏以外の二人は土器製作を行っていない。インフォーマントによると、土器製作の可否は、特定の娘にのみ土器製作技術を継承させた結果ではなく、製作技術の習熟度や本人の自主性に関係している。

ベトゥトゥ村の土器製作に使用される粘土はブワヒワリゲハ (Bwahiwaigeha) という場所にある粘土採掘坑から採掘されたものである。これまでの調査で判明しているように、粘土は採掘地の所有者の許可を得て必要分が採掘される。また、二〇〇六年にイブライミッションで行われたトレハ (toleha: 第四章参照) のための土器製作にM○氏が参加した時は、ダフダフナ (Dahudahuna) という場所の粘土採掘坑から採掘された粘土を使用したという。

以上のように、基本的に、土器製作技術は母親から娘へ継承されていき、土器製作において母系制社会における特性が表れたものと解釈される。彼女らが一定の場所に住み続けることで、その技術が今後も同じ村に住む娘に継承されていくことは間違いない。しかし、必ずしも実娘だけに教えるわけではなく、他クランから婚入してきた義理の娘にも同様に土器製作技術を継承する事例が、クワピクワピヤ (Kwapikwapiya) 村での聞き取り調査によって確認さ

れた。このような夫方居住の場合、夫が亡くなった場合は、原則として妻や子供たちは自身の母方の土地へ戻らなければならぬ。そのため、将来、母方の土地へ戻った際に土器製作を行なうことがあれば、夫方の土地における土器型式内容がさらに広範囲に渡って影響を与えていく可能性が考えられる。

また、ベトゥトゥ村出身のW氏が、現在でもワガマラ村において土器製作を継続していることから、クランと土地の関係に従って、土器型式が拡散していく可能性も想定できるだろう。

(服部智至)

4. トレハの実見

調査期間中、ムウムワヤ村においてトレハを実見する機会を得た。トレハとは死者に関する儀礼であり、死者と同一のクランに属する成員が一同に会し共食を行うという、一種の葬送儀礼である。今回のムウムワヤ村におけるトレハは、一週間前に亡くなったガルボイクランの女性に関するものであった。クランの成員が大勢集まり大規模な共食が行われるのは初日のみであるが、トレハ自体は昼夜を通して2～3日続くという。

(1) トレハの主催者と参加者

今回のトレハの参加者は、ガルボイクランに属する5、6のサブ克蘭の成員と、故人が生前に親しかった友人とからなり、総勢一〇〇名以上を数える。主催者は、ムワムワヤ村の最年長の男性F氏であり、彼は人々から「タニワガ・*taniwaga*」、「ヘッドマン」、「ビッグマン」などと呼ばれた。⁽⁴⁾ 必ずしも個人の近親者がすべて集まらなければならぬという性質ではなく、今回のトレハにおいても、故人の夫は仕事が忙しいという理由で不参加であった。

(2) 持ち寄られた食材

トレハの参加者は、主催者のためにブタやタロイモ、バナナ、パイヤ、ココナッツ、ビンロウなどをそれぞれの村から持ち寄る。ブタはグループごとに生きた状態で持ち寄り(写真1)、主催者はどのブタを誰が持ってきたのかチェックする。屠殺されたブタは、その場で調理されるほかに、均等に切り分けて食材を提供した参加者への返礼(ゴバヒリリ・*gobahilili*)として用意される(写真2)。

豚以外の食材も、誰がどれを持ち寄ったのか主催者によつてチェックされる。食材はヤシの葉製のバッグに入れられ、札をつけることで区別される。枝ごと刈り取られたバナナなどが民家の脇に集めて置かれる一方で(写真3)、

タロイモやビンロウ、パイヤ、ココナッツなどは、四方をヤシの葉で編んだ覆いで囲われた民家の床下に格納される(写真4)。床下では、女性がバッグの開放と、調理に用いる食材の下準備を行う。

(3) 調理道具と料理

トレハでは女性がすべての調理を執り行い、この準備には数日を要するとされる。今回のトレハでは、三十〜四十の大鍋が参加者によつて持ち寄られ調理が行われた。現在ではステンレス製の深鍋が多数使用されるが、一部では伝統的な土器も使用されていた(写真5・6)。土器の多くはワリ式土器であり、数個体を除いてイーストケープ伝統の土器は確認できなかった。ワリ式土器は、アロタウのマーケットで購入したものがほとんどであるが、1点だけワリ島出身の女性がイーストケープの粘土を用いて製作した土器が存在した。器形、施文具(3本歯の櫛歯状工具)はワリ島のもので大きな差異は認められなかったが、文様を描く矩形囲いの間隔が一般的なワリ式土器と比べ広い点が特徴的であった。調理中であつたため、詳細なデータの収集や製作者に関する聞き取り調査はできなかった。今後の課題である。



写真5 調理に使用される土器と深鍋



写真1 トレハに持ち寄られたブタ



写真6 調理に使用されるワリ式土器



写真2 返礼用のブタ肉

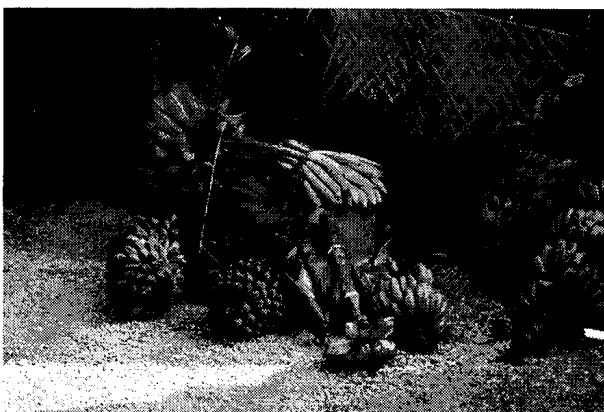


写真3 屋外に集められたバナナ



写真4 床下に格納された食材

おわりに

今回の調査報告ではトパミッションにおける親族構造に焦点を合わせて、各クランの名称と保有するトーテムについて、またそれを社会基盤として開催されるトレハの実態について調査成果を報告した。トーテムシステムを調査して、複雑な体系がまだに残っており、かつて社会において今以上に重要な組織原理として機能したことを窺うことができた。土器製作技術伝承の温床が母―娘を中核とする家族にあり、共通の技術の拡散転移がクラン間の婚姻関係

と婚後居住方式に基づく技術の拡散に関わるものであり、したがって土器の型式現象の多くが親族と姻族を舞台として展開するとの見通しを得ることが出来た。勿論、それだけではなく、それ以外の要因も関与するが、土器型式はいわばそのような血縁関係を母体として形成され、またそれを通じて地理的分布を拡大することも予測できた。縄文時代によく見る土器文様の模倣や転写などの問題も、基本的にそのような血縁関係を基盤とする親族・姻族関係の中で展開していることが予想される。かつて山内清男博士が土器型式を部族社会との関係で読み解いた（山内一九六九）のは、基本的にそのような親族構造を基盤とする中で理解したためである。一方、佐藤達夫教授が複雑な土器型式間の特徴の転移を女性の婚入を前提に読み解いた（佐藤一九七四）のは、ここに述べたように製作者の婚後の居住移転と関係しているのであろう。

これらの研究成果は、土器型式のもっとも顕著な特徴といふべき斉一性と特徴の共有関係、地理的分布などが血縁紐帯と相関していることを示している。次回以降の調査では、それらの関係が実際にどのように型式の特徴に反映するのかについて検討したい。

（高橋龍二郎）

註

- (1) ここでは、メジャークラン内におけるサブ克兰の別を明確にするため、「メジャークラン名（サブ克兰名）」のかたちで表記する。
- (2) 今次調査で確認したメジャークラン7つの内、モデワ克蘭、ヒヒヤウラ克蘭、タゴレワ克蘭、ヘヘゴ克蘭は、トパミツシヨンの東に隣接するケヘラミツシヨンでも確認された克蘭名である（高橋ほか二〇〇七）。ケヘラミツシヨンでは、鳥トーテムしか確認できなかったが、今次調査では少なからずトーテムの空白を埋めることができた。

- (3) 今次調査でガイドを務めてくれたAlfred氏の御教示による。Alfred氏はミルンベイ州の出身で、海洋調査組織に努めており、過去に本地域の親族組織に関する調査を行ったことがあるという。

- (4) 「タニワガ」とは、本地域における克蘭のチーフを意味する言葉である。本地域におけるチーフは、一般的に人類学で意味するチーフとは異なり、卓越した富などを有さない。チーフは、通常克蘭の最年長の男性が務め、克蘭の系譜などに関する知識が豊富であることが求められる。

参考文献

Belshaw, C. S 1955 *In Search of Wealth: A Study of the Exchange of Commercial Operations in the Melanesian*

Society of Southeastern Papua. American Anthropologist
vol.57 No.1 Part 2 Memoir No. 80

P. May & M. Tuckson 1982 *THE TRADITIONAL POT-
TERY OF PAPUA NEW GUINEA*. University of Hawaii
press.

Macintyre. M 1983 Kune on Tubetube and in the Bwanabwa-
na region of the Southern Massim. *The Kula: The New
Perspectives on Massim Exchange*. 369-379

Simon Foale 2005 *Sharks, sea slugs and skirmishes: managing
marine and agricultural resources on small, overpopulated
islands in Milne Bay, PNG*. RMAP Program, Research
School of Pacific and Asian Studies, The Australian National
University

山内清男 一九六九「縄文文化の社会」『日本と世界の歴史』
第一巻 学習研究社

佐藤達夫 一九七四「土器型式の実態―五領ケ台式と勝坂式の
間」『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館

高橋龍三郎、細谷葵、井出浩正、根岸洋 二〇〇七「パプア
ニューギニアにおける民族考古学調査(三)：ミルンベイ州
イーストケーブ周辺の調査概報」『史観』第一五六冊 早稲
田大学史学会

根岸洋 二〇〇七「土器作り民族誌と考古学」『物質文化』84
物質文化研究会

高橋龍三郎、細谷葵、井出浩正、根岸洋、中門亮太 二〇〇八
「パプアニューギニアにおける民族考古学調査(四)」『史観』

パプアニューギニアにおける民族考古学的調査(八)

第一五八冊 早稲田大学史学会

Y.Negishi 2008 Comb and Appliqué: Typological Studies of
Two Ceramic Traditions during the Last Thousand Years
in the Eastern Papua New Guinea. *Bulletin of the
Department of Archaeology, University of Tokyo* 22 119-161

高橋龍三郎、井出浩正、根岸洋、中門亮太、根兵衛平 二〇〇
九「パプアニューギニアにおける民族考古学調査(五)」『史
観』第一六〇冊 早稲田大学史学会

高橋龍三郎、井出浩正、中門亮太 二〇一〇「パプアニューギ
ニアにおける民族考古学調査(六)」『史観』第一六二冊 早
稲田大学史学会